

令和3年度 健康診断結果集計

令和3年度の健康診断(労働安全衛生法における健康診断、全国健康保険協会及び各健康保険組合の生活習慣病予防健診等)の集計結果を報告します。

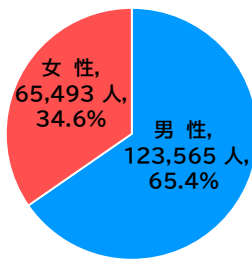
1. 受診者数、性・年代構成

令和3年度の受診者数は男性123,565人、女性65,493人、合計189,058人でした。男女の割合は男性65.4%、女性は34.6%でした(図1)。年代別に割合をみると、40代が最多となり、次いで男性では30代、50代、女性では50代、30代の順となっています。

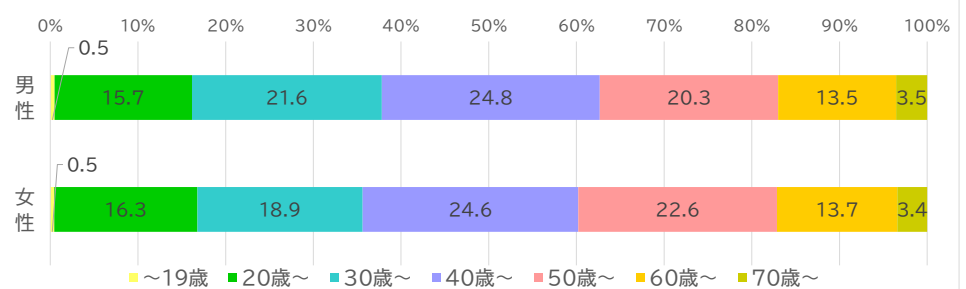
〈表1〉協会受診者数

	~19歳	20歳~	30歳~	40歳~	50歳~	60歳~	70歳~	全体	割合
男性	599	19,379	26,740	30,704	25,132	16,637	4,374	123,565	65.4%
女性	304	10,685	12,348	16,102	14,834	8,985	2,235	65,493	34.6%
全体	903	30,064	39,562	46,888	38,326	25,659	6,075	189,058	

〈図1〉受診者



〈図2〉性・年代別構成



2. 有所見率

(1)性差及び全国値との比較 〈表2〉〈図4〉

性別に有所見率をみると、貧血検査と自覚症状・診察所見以外は男性が高い結果です。

男性は、肥満、血中脂質検査、血圧、肝機能検査の順で、女性は血中脂質検査、肥満、血圧、貧血検査の順で高くなっています。このことから、男性は内臓脂肪蓄積型肥満が原因で脂質異常や肝機能異常をもたらしていると思われます。女性は月経に伴う貧血や女性ホルモンの減少による脂質異常が健康課題といえそうです。

全国値は厚生労働省「定期健康診断結果調」を引用しています。従業員数が50名以上の事業場における有所見率であることを念頭にご活用ください。

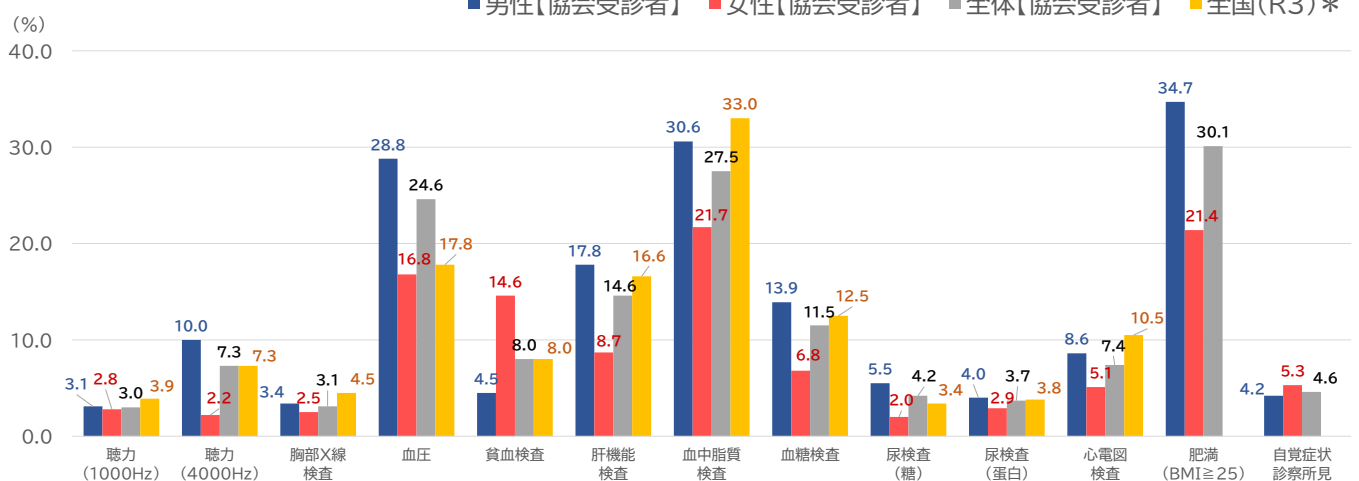
〈表2〉検査項目別有所見率

* 厚生労働省「定期健康診断結果調」より

	聴力 (1000Hz)	聴力 (4000Hz)	胸部X線検査	血圧	貧血検査	肝機能検査	血中脂質検査	血糖検査	尿検査 (糖)	尿検査 (蛋白)	心電図検査	肥満 (BMI≧25)	自覚症状診察所見
男性【協会受診者】	3.1	10.0	3.4	28.8	4.5	17.8	30.6	13.9	5.5	4.0	8.6	34.7	4.2
女性【協会受診者】	2.8	2.2	2.5	16.8	14.6	8.7	21.7	6.8	2.0	2.9	5.1	21.4	5.3
全体【協会受診者】	3.0	7.3	3.1	24.6	8.0	14.6	27.5	11.5	4.2	3.7	7.4	30.1	4.6
全国(R3)*	3.9	7.3	4.5	17.8	8.0	16.6	33.0	12.5	3.4	3.8	10.5		

* 厚生労働省「定期健康診断結果調」より

〈図4〉検査項目別有所見率



(2)年代別有所見率〈図5、6〉

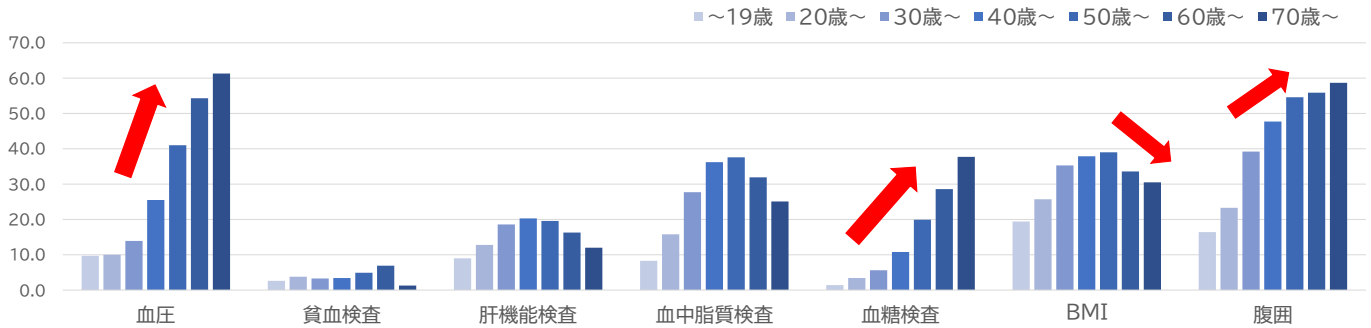
次に、メタボリックシンドロームや動脈硬化に関連する7項目について年代別有所見率を調査しました。

男女ともに血圧、血糖検査、腹囲においては、年代が上がるにつれ上昇しています。男女とも特に血圧の上昇が顕著です。

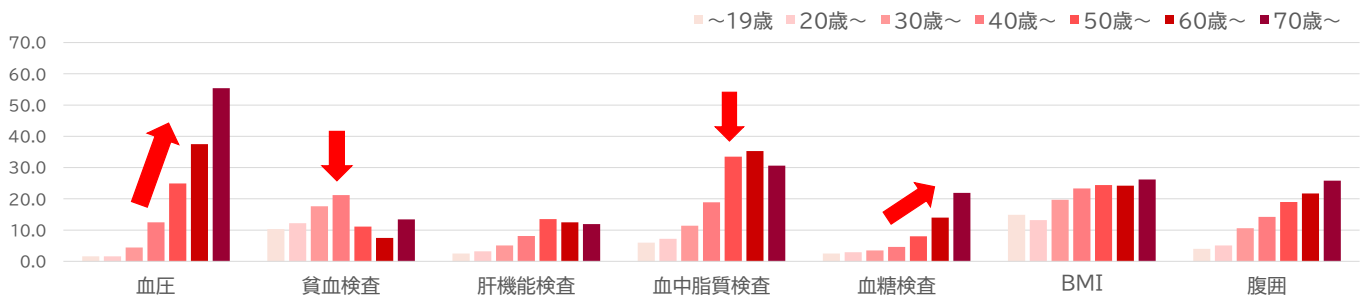
男性の特徴として、BMIの有所見率は60代から減少していますが、腹囲は上昇しています。体重は減少しても内臓脂肪は増えており、この状況から筋肉量の減少などが想定され、ロコモティブシンドロームやフレイルなどの対策が必要であると考えられます。また、40～60代では肥満に関連した脂質異常や肝機能異常がみられており、引き続きメタボリックシンドローム対策が健康課題と思われます。

女性においては、40代までの貧血検査の有所見率が高いことと、50代以降の血中脂質検査の有所見率が高いことが特徴です。月経のある女性は出血に伴う鉄欠乏状態が慢性的に続きます。また閉経を迎える女性は女性ホルモン減少により脂質代謝や骨代謝などに大きな変化が現れるため、動脈硬化と骨粗しょう症対策が重要です。さらにロコモティブシンドロームやフレイルのリスクは男性同様に上がるため、それらへの対策も不可欠です。

〈図5〉年代別有所見率(男性)



〈図6〉年代別有所見率(女性)



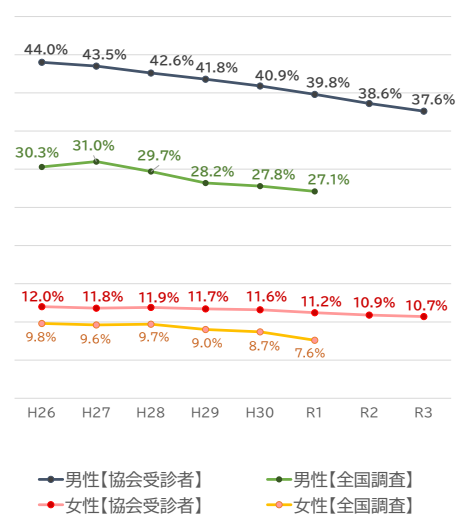
3. 喫煙率

続いて、喫煙率の調査結果を示します。令和3年度当協会健診受診者における男性の喫煙率は37.6%、女性の喫煙率は10.7%でした(図7)。男性の喫煙率は年々減少していますが、全国調査(令和元年国民健康・栄養調査)と比較して依然高い状態が続いています。女性の喫煙率は全国値より若干高く、減少幅も軽微です。さらに年代別にみると、男女ともに最も喫煙率が高いのは40代で42.0%と15.2%です。各年代で減少傾向にあり、特に若い世代のタバコ離れが進んでいるようですが、どの年代も全国値と比較すると高い割合です。

「健康経営」が浸透してきている中、喫煙対策は重要な健康課題であり、経営課題でもあります。喫煙が身体に有害であることは周知の事実ですが、やめたいと思ってもやめられないのが現実です。禁煙外来を活用することやタバコに関する正しい知識を啓発することが重要です。

令和2、3年はコロナ禍により国民健康・栄養調査が中止になりましたのでデータがありません。

〈図7〉喫煙率(年次推移)



〈図8〉喫煙率(年代別)

